向島百花園 古典菊の育成管理改善に関する取組

１． はじめに

向島百花園は、江戸時代(文化文政期)に商人が開いた民営の花園であり、大名庭園とは異なる美しさをもつ庭園である。当園の特徴は、四季の草花を中心とした景観であり、史資料を基に約650種類の植物を管理している。草花はきめ細やかな手入れが必要で、管理方法は多岐にわたるが、これまでは個々の職員の経験に頼ってきた。今回はその1つである古典菊の育成管理の改善に向けた取組を報告する。

２．古典菊の生育不良

古典菊は江戸園芸植物の１つで、当園では開園当初より展示していた記録が残っている。令和５年度、それまでの育成担当であった職員が異動になり、新体制による育成を開始した。作業日誌等の情報を頼りに前年と同様の作業を行ったが、挿し芽の成功率が例年 80%のところ、30%という結果になった。その後の生育も振るわず、例年では古典菊を100鉢程展示するところ、この年はわずか57鉢となってしまった。これを契機に、古典菊の育成方法の見直しとマニュアル整備に取り組み、育成管理の体系化を図った。

３． 生育不良の原因と見直し

生育不良の原因について当初夏の高温のみが原因と考えた。しかし、前担当者への相談や他の古典菊展示施設への見学とヒアリング、改めて専門書籍等でも調べたところ、新芽の育成不足や挿し芽作業日の気温、管理場所の環境等、複数の要因が浮かび上がってきた。そこで、改善に向けた育成方法の見直しと技術の継承を見据えた育成記録及びマニュアルの作成を行った。

３．１ 育成方法の見直し

育成にあたり、主に成功率が低かった挿し芽作業について表－１のとおりポイント別に見直しを行った。

ポイント①	**新芽の育成見直し…新芽を増やし、挿し芽に使用する芽の本数を増やす**	
	前	新芽は、自然な成長に任せる。
	後	新芽は先端を摘み、脇芽を出させて芽数を増やす。施肥を行い脇芽の成長を促す。
ポイント②	**挿し芽作業日の条件を変更…根が出る好条件の気温で挿し芽を行う**	
	前	5月8日実施　天候 雨　気温 17℃
	後	4月28日実施　天候 晴　気温 28℃
ポイント③	**吸水時間を設ける…挿し芽に水を十分吸わせて、成功率を上げる**	
	前	切り取った芽はすぐに挿し芽を行う。
	後	切り取った芽は2～3時間水を吸わせてから挿し芽を行う。
ポイント④	**挿し芽の管理場所の変更…風通しや温度管理、遮光管理を改善**	
	前	挿し芽は温室で育成。(風通しや遮光調整が悪く、温度が過剰に上昇)
	後	挿し芽は屋外で育成。(風通しや遮光管理、温度管理が向上)

表－１

３．２ 育成記録の作成

古典菊の品種ごとの挿し芽本数や、成功率、鉢上げ数を記録した表と作業日の気温や古典菊の生育状態、病害虫の発生等を記録した育成記録を作成した。これにより、古典菊の数の推移だけでなく年毎の生育状態、気候、トラブルの発生と対策等の情報を蓄積していくことが可能になり、次年度以降の育成管理に役立てることができた。

３．３ マニュアルの作成

見直した育成方法をもとにマニュアルの作成を行った。ポイントとして、作業の必要性や資材の選定についての理由を明記した。これにより、作業の意図や重要性を理解して管理を行うことができるようになった。（表－２）

また、文章だけでは作業のイメージが伝わりにくいため作業内容ごとの写真一覧表を作成し、マニュアルに掲載した。（写真－１）

4月末～5月初旬	挿芽	土 配合比 鹿沼2：バーミキュライト1 鹿沼土小粒10ℓ バーミキュライト5ℓ 資材 パレット8枚 放虫用バケツ品種数分(36) 名札 割りばし ルートン（発根促進剤）	●土の準備 ①鹿沼土2：バーミキュライト1の割合で土を作る。 ②パレットに8分目まで土を入れ、たっぷり灌水する ●挿し芽作業 ①バケツに品種名を書き、水を入れる。 ②菊の枝を10～15cm程で切りとり、品種ごとのバケツに入れる。一種類ずつ16～18本程採取する。枝が足りない場合は中間の茎も切り取る。
●作業条件 ①株の状態 菊の芽が手でやや曲がるくらいの状態 ②天候 晴天（雨天や気温の低い日は必ず避ける）			

表－２（マニュアル）



写真－１（写真一覧表）

４．育成方法見直しによる成果と新たな試み

取組みの結果、挿し芽の成功率は令和５年～7 年の間で 30%から 95%に改善し、鉢数は 57 鉢から 170 鉢に増加した。展示場所を広場のみから園内５か所に増やし、明治時代に描かれた当園の秋の風景を再現することができた。（写真－２）（写真－３）



写真－２（明治時代の絵図）



写真－３（令和７度展示）

育成方法が体系化できたことから、新たな試みにも挑戦した。令和６年度は、江戸時代の浮世絵に描かれた菊の番付（人気投票）を開催し、来園者による投票を通じて江戸の園芸文化を体験する機会を提供した。

令和７年度は、番付で横綱となった品種の大づくり作製に挑戦し、１つの株から 100 以上の花をつけることに成功した。この大づくりは評判を呼び、複数メディアから取材を受け、古典菊に限らない当園ならではの植物の育成管理についての発信や、来園者数増加に寄与することができた。（写真－４）



写真－４（菊の大づくり）

５．おわりに

向島百花園の独自の景観を維持し後世に残すために、育成管理技術の継承は重要な責務であると考える。本取組みにより、古典菊育成管理の体系化ができ、担当者が変わっても質の良い古典菊を育成する土台を作ることができた。

今後は更に、育成記録を積み重ねマニュアルの精度を高めていくとともに、菊の接ぎ木等の難度の高い育成技術を習得し、秋の魅力を高めていく所存である。また、春の七草や変化朝顔、山野草等についても同様に取り組み、四季折々の花々や江戸の園芸文化を楽しめる当園ならではの景観を未来に継承していく。